



金属のくぎは1本も使わず、すべて木釘で仕上げる。すべて
 するように出てくるひきだしは、職人の腕の見せ場だ。

紀州桐箆笥

和の「美」極めた収納の芸術品 和歌山城を支えた匠の技

日本の「美」と「技」の凝集。和服の女性を連想させるような、絹のようになめらかな手触り。軽いうえに、熱伝導性が低く燃えにくいため、

古くから重宝された桐。和歌山城の築城にたずさわった職人によって継承されたという紀州桐箆笥は、江戸末期ごろから、武家や商家の嫁入り道具として名をはせた。

触ってみれば、違いがわかる。手を添えるだけで、スツと滑り出てくる引き出し。戻すと、隣の引き出しが手品のようにはスツと出てくる。高い工作精度ゆえの気密性。昔

は職人が、吹き出してくる風でハーモニカを鳴らして腕を競ったという。この気密性が虫や湿度から大切な着物を守る。

ノミ砥ぎで3年、カンナ砥ぎで10年以上かかると言われる厳しい世界。原木のアク抜きにはじまり、木目をみながら部材取りを決める「木取り」、歪直…。傷つ許されない作業だけに、一瞬たりとも気が抜けない。大切に使いは親子3代、100年は持つ。高い技術に支えられた信頼性が、長く受け継がれている理由だ。



志賀 聡一 職人歴10年

シガ木工 / 和歌山市延時13-4
 電話 / 073-452-2011

7代続く職人の家に生まれ、現在は社長で伝統工芸士の父・啓二さんとともに働く。コンピューターでの図面描きから仕上げまでを担当。「伝統を守りながらも、現代の洋間にも合う製品を模索していきたい」。ローボード風の焼き桐の小袖など、新製品にも若いセンスが活かされている。



PRINCE of Folkcraft
 若き傳承者

この伝統マークを使った伝統証紙が貼られている工芸品は、産地組合等が実施する検査に合格した経済産業大臣指定伝統的工芸品です。



伝統マーク